

令和元年度地域課題研究懸賞論文 受賞論文（佳作③）の概要

実施主体：学園都市づくり交流会議

学園都市づくり交流会議では、東広島市における学生等の学術研究活動を促進し、大学と地域が連携したまちづくりの推進に寄与することを目的に東広島市の地域課題を研究した論文を募集・表彰する「地域課題研究懸賞論文事業」を実施しています。

この度、令和元年度の受賞論文について、厳正な審査の結果、6件決定しました。

なお、受賞論文については、著者個人の意見であり、学園都市づくり交流会議及び東広島市の公式見解ではありません。

地域課題研究懸賞論文

在日中国人の子どもたちの適応ルートを考
える
—東広島市を中心に—

広島大学大学院 文学研究科
博士課程後期1年
許 子豊

研究目的

- これまで、日本では外国籍の子どもたちについて数多くの研究がなされてきた。言語問題・異文化適応、アイデンティティ、多文化共生など多様な視点から外国児童の問題についての研究が多くある。このことは、今現在の日本社会における日本語を母国語としない外国籍の子供たちの増加、それに伴っておきる問題の多様性を反映している。文化の違いなどから適応に問題が生じており、今後対応が迫られている。
- 現在、多くの外国籍の子どもたちは日本の学校文化を押し付けられ、それに向けて馴化させられている。この過程において多くの外国籍は自分のアイデンティティと葛藤しながら苦しんでいる事実が存在する。本研究では、外国籍の子どもたちの視点を重視し、彼らの声を慎重に拾いながら、第三者ではなく、「当事者と共に」この問題について考察したい。また本研究は、東広島市の方々に東広島市に住む外国籍の子どもたちの視点を知ってもらいたいと考え、投稿するに至った。

研究方法

- 本稿では2019年8月から9月にかけて、東広島市に居住する中国人ニューカマー3名に半構造化インタビューを行った。調査対象は筆者がボランティアで担当している日本語教室の学生である。調査するにあたって調査対象と十分な信頼関係を築いたうえで行っている。インタビューは教室内、公共施設、飲食店などで行った。インタビューは1時間から2時間程度を予定し、必要に応じて引き延ばしと後日追加インタビューなどを行った。インタビューは日本語が不自由な子どもがいたため全員中国語で行い、後日筆者が文字化し翻訳した。

内容①日本語習得とコミュニケーションコーナー

- 東広島市では外国人に向けてのコミュニケーションコーナーがあり、そこは東広島市在住の外国人の人をサポートする施設である。
- コミュニケーションコーナーでは日本語教室が開かれており、大人・子どもと限らずに日本語を勉強できる。（筆者はここで外国の子どもたちと出会っている）
- 外国の子どもたちにとって日本語教室はとても親しみやすく、自由に意見が言える場所である。
- 子どもたちの日本語習得スピードは日本語教室だけではなく、家庭によっても影響される。

内容②来日時期によるそれぞれの違い

- 来日年数がそれぞれ、来日～6ヶ月、2年8ヶ月、4年4ヶ月の子どもたちに対してインタビュー調査を行い、彼女らの現状を時期に分けて探った。（母国語がすでにある程度確立している子どもを対象に）
- 来日～6ヶ月（初めて感じる日本の学校）
- 来日～2年8ヶ月（言葉（生活言語）が習得できる時期）
- 来日～4年4ヶ月（生活言語と学習言語が習得され日本の学校に慣れる時期）
- 3つに分けて考察してみた。

内容③来日～6ヶ月「混乱期」

- 日本に来日する子どもたちの多くは、日本語学習をせずに来日することが多い。多くの子どもたちは心の準備もなく、急に親に連れて来られている。（多くの親は余計な心配をさせたくないなどの理由から子どもたちには伝えずに日本に来ることが多い）
- 日本語がまったくわからないため、学校では簡単な挨拶ですらできずにいる。子どもたちは心の準備なく、日本に来ているため、混乱しやすい状況に陥る可能性が高い。
- 日本語も喋れずになにもわからないため、すべてのことにおいて受け身状態となり、人の助けがとても必要となる時期である。

内容④来日～2年8ヶ月「不適合期」

- 日本の学校では、「違い」や「異なること」に対する許容度はきわめて小さく、まわりと同じであり、同じ行動をとることを暗黙のうちに求める傾向が強い。（例えば集団下校、給食・掃除の当番制、服装や持ち物に対する規制など）
- 外国の子どもたちはある程度日本語を習得できても、掃除のルールや授業のよる教室替えなど日本の子どもたちにとって当たり前前の行動ができずにいる。
- 当たり前前のことはできずにいると、クラスから孤立しやすくなり、クラスメートと馴染めにくくなる。

内容⑤来日～4年4ヶ月「選択期」

- 日本の学校では、差別がないようにすべての子どもたちを日本人と見なし、教育を施している。しかしそれは逆に子どもたちの自らのアイデンティティ（外国の）を主張させにくくしている。
- このことは子どもたちの外国人性を抑圧し、日本の言語・文化を強制的に適応（日本人化）させようとしていることにもなりやすい。
- 子どもたちは学校において、ある時期から選択が迫られる可能性が高い。ある程度日本文化にも適応し始めるが、そこから彼らは、自らのアイデンティティを隠し日本人（日本人化）として振る舞うか、はたまた積極的にアイデンティティを表し、チャレンジして認めてもらうかを選択しなければならない。

結果

- 始まりの「混乱期」では、学校のみならず、親の方針（来日前の日本語学習や心の準備）による影響も大きいとわかった。過点の「不適合期」では、さまざまな部分において日本人学生との「違い」が鮮明に表れるようになり、クラスから「注意」、酷い場合は「孤立」もされる可能性が大きいことがわかった。しかしこれは、ニューカマーの子どもたちが自ら「違い」を表そうとしているのではなく、日本人の常識や学校のルールを理解していないことから起因する。終点の「選択期」では、ニューカマーの子どもたちが「日本人化」か「ありのままの自分」を「選択」しなければならない状況になるとわかった。その中で、「外国人」として受け入れる雰囲気为学校にあるかどうかも重要とわかった。

考察

- 以上から見てきたように、日本の学校では、外国人の子どもに同化を迫り、みんなと同じように行動を求める傾向が強い。「みんな（日本人）とは違う」子どもはクラスから「孤立」させられる可能性が高く、ニューカマーの子どもたちも圧力のもと、日本の学校文化に順化しようとする傾向が高い。
- それとは違い、コミュニケーションコーナーは子どもたちにとって自由に意見が言える場所であり、外国人の子どもたちにとってとても重要な位置づけにあるを私は考える。
- 今後コミュニケーションコーナーと東広島市の学校より良い関係を築き、連携していけるように期待していきたい。

今後の課題

- 本論の課題は、まず対象が3人と少人数であることから客観的に論じにくいことがある。本稿は東広島市に在住する子どもたちを対象にしたため、本稿で明らかにされた内容がほかの地域の学校に当てはまるかどうかは検討すべきである。次に、「選択期」において、「外国人」として受け入れられた調査データを得ることができたが、「選択期」にて「ありのままの自分」を選びなおかつ学校では「外国人」を受け入れる雰囲気を整っていない調査データを得られてないことが大きな欠陥点であると考えられる。これに関しては、今後フィールド調査を強化し補完していきたい

- ご清聴ありがとうございました